

研究ノート

幼稚園教育実習 I 実習指導の取り組みについて その2

二宮貴之・櫻井京子・井上聖子

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成28年1月29日受理)

Outcomes of instruction for kindergarten practice teaching Part 2

Takayuki NINOMIYA, Kyoko SAKURAI, Satoko INOUE

(Department of Children's Studies)

(Accepted January 29, 2016)

Abstract

This study conducted comparative analyses of changes in awareness of students prior to and post undergoing kindergarten student teaching, examined what students had learned during student teaching, and the similarities and differences between students' self-evaluation and that of the kindergarten itself following student teaching. The results proved effective, indicating that comparative figures for student awareness prior to and post student training had risen.

Key words : Kindergarten Practice Teaching 幼稚園教育実習
Self-evaluation Analysis 自己評価分析
Teacher Training Guidance 実習指導

1. はじめに

子ども学部紀要第6号において、櫻井・二宮・井上（2015）は、平成26年度幼稚園教育実習Ⅰの事前指導について、担当する教員の取り組みの内容や成果、今後検討を要する課題について検証した。また並行して、実習直前期の学生を対象に「実習において求められる資質に関する自己の現状と課題」についてアンケート調査を実施した。このアンケート調査によって、学生にとっては実習前に改めてこれまでの自分自身の生活態度を振り返る機会になった。また、実習指導においては、実習前の学生が自らの資質についてどのように自己評価しているか、さまざまな視点における結果を得ることができるとともに、その得られた結果を分析することによって、学生自身が日常生活において配慮している内容や問題点・課題、実習に対する不安な心情についても明らかにすることができた。

これらを踏まえ、本研究では「実習において求められる資質」について、実習期間中の学生の姿勢や実習事後指導の際得られた内容の検討を行い、実習前と実習後で学生の意識がどのように変化したのか、実習で何を学んだのか、実習後の学生の自己評価と実習園の評価の類似点や相違点はどのような内容であるのかについて分析する。

それらの結果をもとに、学生の実習に対して実習指導がどのように活かされているのか、また実習指導に求められている課題は何であるのかについて明らかにすることによって、今後、より実践に役立つ実習指導を行うための礎にすることを目的とする。

2. 実習の概要

（櫻井・二宮・井上（2015, pp.80-80）の再掲）

（1）幼稚園教育実習Ⅰの目的（「本学幼稚園教育実習の手引き」より抜粋）

- ①幼稚園教育の実際に触れ、観察・参加・部分実習等の機会を通じて幼児理解を深める。
- ②実習生としての自覚を持ち、教師となる意欲を高め、今後の学習への課題を明確にする。

このように幼稚園教育実習Ⅰにおいては、まずは実際に子どもとかわりながら子どもの姿や保育に対する正しい理解を深めるとともに、実習中に経験したさまざまな内容について自分自身の課題を発見し、改善を試みることで今後の実習や学習に活かし

ていくことを目的としている。

（2）実習園

附属S幼稚園（佐賀県佐賀市）

- ・ 3歳児 4組
- ・ 4歳児 4組
- ・ 5歳児 4組 計12組

（3）対象学生

子ども学部子ども学科2年生77名

- ・ aクラス40名
- ・ bクラス37名

（4）実習期間と園における配属組

- ・ 10月2日（木）～10月16日（木） aクラス
- ・ 11月18日（火）～12月2日（火） bクラス
- a bクラスとも3、4、5歳児合計12組それぞれに学生3～4名配属

3. 実習指導の具体的内容（実習事後指導）

（1）授業計画

表1は、子ども学部子ども学科の平成26年度「幼稚園教育実習Ⅰ事後指導」授業計画である。以下にその概要を示す。なお、文中①から⑩は授業の回を表している。

①

- ・ 交流会（幼稚園教育実習Ⅰを通して学んだこと・学びたいこと）

aクラス：幼稚園教育実習Ⅰ終了後

反省点、改善点の発見・整理

bクラス：幼稚園教育実習Ⅰ実習前

具体的な目標の設定、課題の発見・整理

②～⑤

- ・ 実習の学びの図解づくり

テーマの設定

aクラス：実習で学んだこと

bクラス：実習で学びたいこと

→⑤は実際に学んだこと

⑥～⑦

- ・ 実習の学びの図解発表

3歳児、4歳児、5歳児縦割りグループ編成で発表

質疑応答を通して、各年齢の内容を共有する

表1 平成26年度「幼稚園教育実習Ⅰ事後指導」授業計画

回	月日	授 業 計 画	備 考
実習期間		幼稚園教育実習Ⅰ（S幼稚園） aクラス 10.2（木）～10.16（木）	
①	10.17	・実習の振り返り（実習の学びの図解づくりに向けて） a. bクラスの交流会を通して aクラス：実習において学んだこと 反省点・改善点の発見 bクラス：実習において学びたいこと 目標の設定・課題の発見	・実習終了したaクラス学生と、これから実習する bクラス学生の交流会を通して、それぞれ学んだこと、学びたいことの整理をする
②	10.31	・実習の学びの図解づくり①（KJ法） テーマの設定 aクラス：実習で学んだこと bクラス：実習で学びたいことはなにか	・KJ法による図解づくり ↓
③	11.7	・実習の学びの図解づくり② a. bクラス：個人のラベルをグループ内で整理する	
④	11.14	・実習の学びの図解づくり③ a. bクラス：ラベルを小皿→中皿にまとめる	
実習期間		幼稚園教育実習Ⅰ（S幼稚園） bクラス 11.18（火）～12.2（火）	
⑤	12.5	・実習の学びの図解づくり④ aクラス：図解づくりの完成 bクラス：学びたいことは何か→実際に学んだこと	↓
⑥	12.12	・実習の学びの図解発表① 幼稚園縦割りクラスのグループに分かれて発表 aクラス発表・質疑応答 各年齢の内容を共有する	・発表→質疑応答→共有 ↓
⑦	12.19	・実習の学びの図解発表② 幼稚園縦割りクラスのグループに分かれて発表 bクラス発表・質疑応答 各年齢の内容を共有する	
⑧	1.9	・幼稚園教育実習Ⅰの総括 実習によって学んだこと 実習生の資質についての自己評価	
⑨	1.16	・教材研究①	
⑩	1.23	・教材研究②	

- ⑧
・幼稚園教育実習Ⅰの総括
実習生の資質についての自己評価
実習によって学んだこと

(2) 実習中の学生の様子

図1は、実習園において実習初日のオリエンテーションを受けている様子である。

図2は、責任実習の様子（その1）である。

図3は責任実習の様子（その2）である。

図4は責任実習後の反省会の様子である。



図1 実習初日のオリエンテーションの様子

表2 アンケート調査項目（学生）

評価項目		自己評価	現状と課題
実習態度	毎日の生活のリズムや体調を崩すことなく実習を終えることができましたか。	A B C D	
	教師とのコミュニケーションを自分からとって、信頼関係をもって接することができましたか。	A B C D	
	教材の整理整頓、保育室やトイレ等清掃など自分から熱心に迅速にできましたか。	A B C D	
	歌や手遊び等の保育技術を身に付けることに意欲的でしたか。	A B C D	
保育者としての資質	保育中はいつも言動が心優しく快活であることを心がけられますか。また、子どもに対して感情的な言動はなかったですか。	A B C D	
	積極的に幼児の生活に溶け込み、個々の子ども達と関わり深め、行動を理解するように努めましたか。	A B C D	
	指示された仕事の遂行に責任を持って取り組み、報告等も確実にできましたか。	A B C D	
	誰に対しても挨拶を進んで行い、礼儀や身だしなみ等保育者として常識をわきまえた行動がとれましたか。	A B C D	
保育技術	自分の担当したクラスの子どもの発達段階をふまえた援助を心掛けましたか。	A B C D	
	保育中個々の幼児や、クラス全体への目配りや援助を心掛けましたか。	A B C D	
	保育に必要な保育技術をいくつか身に付けることができました。	A B C D	
	保育の意味や幼稚園の役割をおおむね理解できました。	A B C D	



図2 責任実習の様子（その1）



図3 責任実習の様子（その2）



図4 責任実習後の反省会の様子

4. 学生に対する「幼稚園教育実習Ⅰ」事前・事後アンケート調査と実習園からの評価表の分析

平成26年12月、幼稚園教育実習Ⅰ事後指導の授業内において、学生に以下の項目内容のアンケート調査を実施した。調査内容については表2（学生）表3（園の評価表）に示す。なお、アンケート項目は学生に対して実習前の9月に調査したものと及び実習園に依頼している評価表と同様である。このアンケート調査結果をもとに以下の2つの側面に視点をおいて分析、検討を行う。

表3 幼稚園教育実習Ⅰ評価表

平成 年 月 日

幼稚園教育実習Ⅰ評価表		西九州大学 子ども学部 子ども学科						
実習生氏名		学籍番号						
保育所(園)名		園長名	印					
所在地								
実習期間	出勤日数	病欠	事故欠	その他	遅刻	早退		
平成 年 月 日～ 月 日	日	日	日	日	日	日	日	
評価項目・内容				評価				
実習態度	○出勤状況 健康管理・生活管理や欠席・遅刻等の有無			A	B	C	D	
	○協調性 職員との挨拶、コミュニケーション・連携・協力			A	B	C	D	
	○環境整備 整理整頓、清掃など環境整備への取り組み方			A	B	C	D	
	○実習意欲 保育の知識・技術の習得や幼児理解への意欲			A	B	C	D	
保育者としての姿勢	○情緒の安定・愛情 情緒的に安定した態度や行動、乳幼児への愛情と公平性			A	B	C	D	
	○積極性・意欲 教材研究や遊びへの参加意欲、園生活に溶けこむ努力			A	B	C	D	
	○責任感 実習日誌等の提出や仕事の遂行への態度や責任、報告等			A	B	C	D	
	○礼儀・身だしなみ 職員に対する礼儀や言葉遣い、保育者として礼儀や身だしなみ等			A	B	C	D	
保育の指導や技術	○発達の理解 発達段階の把握や幼児の内面理解			A	B	C	D	
	○指導計画作成・援助方法等の理解 幼児の姿に即した指導計画作成と個に応じた援助や、クラス全体への援助方法			A	B	C	D	
	○援助技術の習得・反省と理解 基礎的な保育技術の習得、保育の反省と指導への受け止めや理解			A	B	C	D	
	○保育理解 保育や保育所の役割等の理解			A	B	C	D	
総合所見				総合評価	A	B	C	D
				評定者	印			

備考

- ① 評価は【A=優れている、B=普通、C=努力を要する、D=不可】の4段階です。評価項目と内容を参考に評価をお願い致します。D評価は不可判定となり、再実習が必要となります。
- ② 総合評価が「D-不可」の場合は、総合所見の欄に、その理由をお願い致します。
- ③ 評価表は、実習終了後2週間以内にご返送下さいますようお願い致します。

①実習事前と事後の学生の意識の変化

意識の変化の内容や理由について検討し、実習経験が学生に与える影響について検証することを目的とする。

②実習園からの評価と学生の自己評価の比較分析

実習園に依頼した実習後の評価表の内容と、学生の自己評価の内容を比較することによって、その共通点や相違点について分析し、実習園が保育者を目指す学生に求めていることがどのような内容であるかを検証することを目的とする。

評価項目についてはA B C Dの4段階である。その結果については、A(良くできる) = 4点、B(概ねできる) = 3点、C(もっと頑張る必要がある) = 2点、D(できない) = 1点のように点数化したものを集計データとして掲載している。また、学生による実習後の反省事項の自由記述についても記述内容を精査した上で記述を拾い上げて分類し、量的・質的の両側面から分析を行っている。

表2は、実習の事前・事後に学生に実施したアンケートであり、表3は、実習園が学生の評価に用いる幼稚園教育実習Ⅰの評価表である。

5. 学生の実習事前・事後の自己評価の比較分析及び学生の実習事後評価と実習園から出された評価表の比較分析について

本研究では、大別して2つの分析を行っており、1つ目は、幼稚園教育実習Ⅰ事前指導の授業内において学生に実施した事前アンケートの自己評価と実習事後のアンケートの自己評価の項目を比較分析した。そして、2つ目は実習事後のアンケートの自己評価と実習園から出された評価表とを比較分析した。加えて、数値の記載だけでは表出が困難である、学生たちの「実習態度」、「保育者としての資質」、「保育技術」に関する内面を拾い上げる為、実習事後のアンケート調査より反省事項の自由記述に記載された内容をカテゴリー別に分類しまとめた。

学生は幼稚園教育実習Ⅰの事前と事後で下記項目についてA B C Dの4段階で自己評価を行っている。

1. 事前アンケート調査の結果(評価項目)と事後のアンケート調査(評価項目)結果の比較分析について

【実習態度について】

①項目概要

「実習態度について」の項目においては、「生活リズム」「コミュニケーション力」「環境整備」「保育技術を身につける意欲」の4項目について質問している。

②学生の実習事前及び事後の自己評価の対比

「実習態度について」の評価をA = 4点、B = 3点、C = 2点、D = 1点と点数化し、集計している。

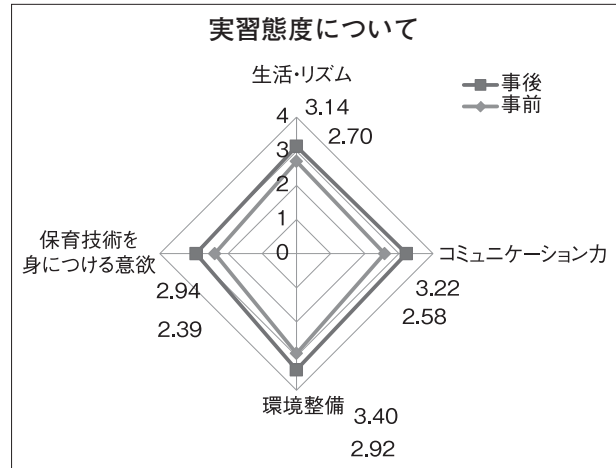


図5 事前及び事後の実習態度(学生)についての対比

図5は、4項目に分類した実習事前・事後の実習態度についてグラフで対比させたものである。事前の実習態度についての詳細は、『西九州大学紀要第6号』に前掲しているため、今回は実習事後の学生の実習態度についての詳細の掲載と、実習事前・事後の学生の意識についての比較分析を行う。実習事後の「環境整備」に関する項目は、4項目中最も高い数値を示し、4点満点中(以下全て4点満点のため「4点満点中」を省略)3.40であり、2番目に「コミュニケーション力」に関する項目で3.22、3番目に「生活リズム」に関する項目で3.14、4番目に「保育技術を身につける意欲」に関する項目で2.94であった。実習事前の「実習態度」に関する項目の数値の順列は、1番目が「環境整備」に関する項目で2.92、2番目に「生活リズム」に関する項目で2.70、3番目に「コミュニケーション力」に関する項目で2.58、4番目に「保育技術を身につける意欲」に関する項目で2.39であった。実習事前・事後のアンケート調査結果を比較すると、環境整備に関する項目は実習事前・事後いずれにおいても最も高い数値を示し、「保育技術を身につける意欲」に関する項目は最も低い数値を示していた。しかし、実習事前調査の2番目が「生活リズム」、3番目が「コミュニケーション力」であったのに対し、実習事後調査の2番目は

「コミュニケーション力」、3番目が「生活リズム」と事前と事後では順列が逆転していた。このことから、実習に参加する以前は他者とコミュニケーションをとることに不安を抱えていたが、いざ実習に参加してみると自分たちなりにコミュニケーションをとることができたと感じる学生が多数いたと言える。また、実習に参加する以前は、生活リズムを整えて実習に参加することに自信があった学生たちが、いざ実習に参加してみると「治りかけの風邪がぶり返してしまい、咳き込むことがあった。」などの記述が裏付けているように実習中に体調を崩し生活リズムの乱れを感じていた学生が多数いた。また、事前アンケートの「生活リズム」、「コミュニケーション力」、「環境整備」、「保育技術を身につける意欲」の各項目の平均値は、2.65であったのに対し、実習事後では3.18に数値が上昇し、その差は0.53であった。実習事前に比べ事後のグラフの数値が上回っていることから相対的に各項目の学生の「実習態度」に対する意識が向上していたと言えよう。

③実習園の学生に対する評価と学生の事後の自己評価の対比

「実習態度について」の評価をA = 4点、B = 3点C = 2点、D = 1点と点数化し、集計している。

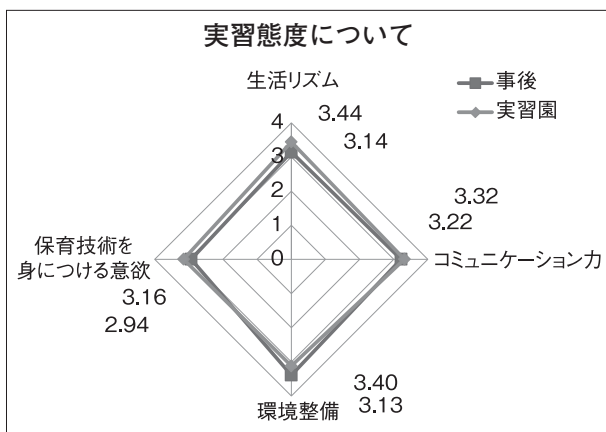


図6 実習園の学生に対する評価と学生の事後の自己評価の対比

図6は、「実習態度」に関する各項目の実習園の評価と学生の実習事後の自己評価とをグラフで対比させたものである。実習園から出された評価表によると、「生活リズム」に関する項目は、4項目中最も高い数値を示し、3.44であり、2番目に「コミュニケーション力」に関する項目で3.32、3番目が「保育技術を身につける意欲」に関する項目で3.16、4番目に「環境整備」に関する項目で3.13であった。

一方、実習事後の学生の「実習態度」に関する項目の結果は、1番目が「環境整備」に関する項目の数値が最も高く3.40であり、2番目に「コミュニケーション力」に関する項目で3.22、3番目に「生活リズム」に関する項目で3.14、4番目に「保育技術を身につける意欲」に関する項目で2.94であった。実習園の評価と学生の事後の自己評価の項目を順列で見ると、「コミュニケーション力」に関する項目のみ同列の2番目になっておりその他は各項目で順列が入れ替わっていた。特徴的なのは、「環境整備」に関する項目で、学生の自己評価では最も高い数値が表れていたのに対し、園の評価では最も低い数値であった。このことは、多くの学生は、清掃や整理整頓ができていたと感じているが、学生を指導した保育者側からすると学生の「環境整備」についての意識などはまた不十分であるということが窺い知れた。全体としては、学生と実習園間の評価に大きな差は表れていなかった。学生の平均値は、3.18なのに対し実習園は3.26であり、園の評価が学生の評価を上回る結果となった。

④自由記述

表4は実習態度について自由記述をまとめたものである。

【保育者としての資質について】

①項目概要

「保育者としての資質について」の項目においては、「情意面」「積極性」「責任面」「マナー面」の4項目について質問している。

②学生の事前及び事後の自己評価の対比

「保育者としての資質について」の評価をA = 4点、B = 3点C = 2点、D = 1点と点数化し集計している。

図7は、4項目に分類した実習事前・事後の「保育者としての資質」についての集計結果をグラフで対比させたものである。事前の「保育者としての資質」についての詳細は、西九州大学子ども学部紀要第6号に前掲しているため、今回は実習事後の結果について詳細を示し、実習事前及び事後の学生の意識について比較分析を行う。実習事後の「責任面」に関する項目は、4項目中最も高い数値を示し、3.49であり、2番目が「マナー面」に関する項目で3.34、3番目が「積極性」に関する項目で3.33、4番目が「情意面」に関する項目で3.14であった。実習事前の「保育者としての資質」に関する項目の数値の順列は、1番目が「マナー面」に関する項目で

表4 自由記述（実習態度）

生活リズム	
ネガティブ	ポジティブ
治りかけの風邪がぶり返してしまい、咳き込むことがあった。	毎日元気に活動に参加することができたのでこれからある実習でも体調面に気をつけていきたい。
生活のリズムはきちんと整えられていたが、体調管理不足で頭痛や風邪をひいてしまった。	責任実習の準備などは土日に集中して行い、毎日早寝早起きをするように心がけた。これからも続けていくことが大切だと思った。
少し体調を崩したので、もっと手洗いうがいを徹底すればよかった。	早寝、早起き、朝ご飯を徹底して行ったので生活リズムを崩すことなくできた。
毎日早寝早起きの生活リズムを保つことができたが、子どもたちの咳などがうつり、咳が止まらない日があった。マスクを着用するように心掛ける必要があった。	毎日、決まった時間に起き、ご飯を食べ、日誌を書き寝る事ができ、体調万全で実習に取り組む事が出来た。
初日が少し遅刻してしまったため、もっと早く来るべきだった。また、実習の後半に鼻水が少し出るなど、わずかだが体調を崩したため、もっと早く寝て、十分な睡眠をとるべきだった。	早寝早起きを続けられた。
コミュニケーション力	
ネガティブ	ポジティブ
子どもと関わることに必死でありコミュニケーションをとれなかった。	分からないことは聞いて、反省会もためになるお話を聞いた。
あまり自分からコミュニケーションをとることはなかった。	何か分からないことや子どもとの関わりで困ったことがあれば必ず担任の先生や実習生に伝え、信頼感を持って接した。もっと話す機会を自分から増やすことが大切だと思った。
質問事項を時間が経ってしまうと忘れてしまい、担任の先生などに質問する内容を忘れてしまっていたので、メモを取ることをしっかりしておこうと思った。	挨拶は基本で、分からない所など教えてもらった時には感謝の気持ちを大切に、10日間過ごしてきた。
あまり自分から積極的に質問しに行ったりすることができなかった。	先生と共に活動の手伝いをしたりしっかりコミュニケーションをとった。
分からない所をもっと積極的に聞くべきだった。	自分から質問などを行い、積極的に接することができました。また、実習の終盤では先生の動きを見て、先を見て行動することができた。
環境整備	
ネガティブ	ポジティブ
たまに先生から言われないとしないことがあった。	毎日ピカピカに掃除が出来た。トイレトレーニング用のトイレの掃除も頑張った。
気付かなかったところや先生に言われてすることがあった。	子どもが一日を充実して過ごせるような環境づくりを行うことができたので良かった。
目についたらゴミなどを拾ったり、机を拭いたりしていた。しかし、後半は、だらけていたと思う。	保育室や廊下、トイレなど毎日ほうきや雑巾で清掃することができました。しかし、もっと探せば窓拭きだったりすることが見つけられたと思う。
決められた仕事だけではなくプラスアルファのことも出来たら良かったのかなと思います。今後は、自分から進んで指示待ちにならないようにしたい。	子ども達が気持ちよく園で過ごすことができるように実習のメンバーと分担しながら清掃を取り組んだ。もっと自分から何をすれば良いか見つけることが大切だと思った。
子どもたちの目線に立った清掃が欠けていた。	保育室もトイレも自分がお世話になる場所だったので、他の人も気持ちよく使えるようにできる限り丁寧に清掃した。
保育技術を身につける意欲	
ネガティブ	ポジティブ
決まったピアノ曲しか弾けなかった。	子どもたちの横で共に楽しく手遊びや歌を歌うことができました。勉強になったことばかりだった。
ピアノは苦手なため、弾きたいと思っても難しかった。しかし、歌や手遊びはなるべく多く参加した。	子どもと一緒に手遊びなどを行い意欲的にできた。
子ども達に引張っていてももう形になっていた。	率先して手遊びなどを行った。
歌や手遊びをあまりすることがなく、責任実習の時などに、自ら進んで手遊びをするべきだった。	事前に調べて多くの手遊びや歌を身に付けてから実習に取り組んだ。
ピアノは苦手だということと逃げてしまっていたと思う。	先生が行っているのを見たり、まねをしたりして子どもに興味を持ってもらえるようにした。

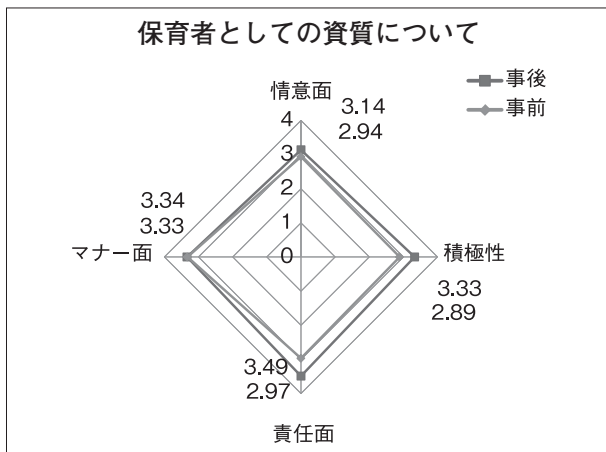


図7 事前及び事後の保育者としての資質（学生）についての対比

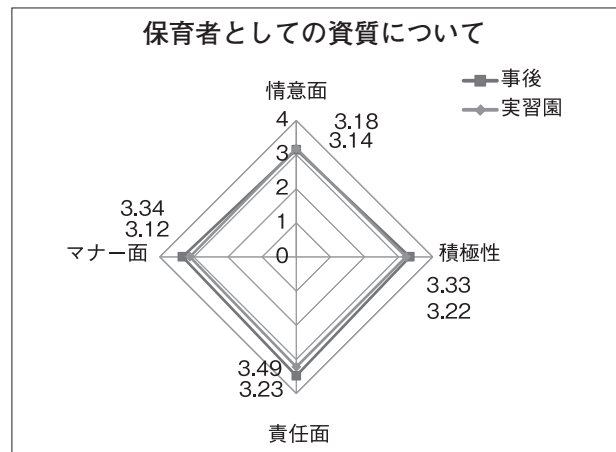


図8 実習園の評価と学生の事後の自己評価の対比（保育者としての資質について）

3.33, 2番目が「責任面」に関する項目で2.97, 3番目が「情意面」に関する項目で2.94, 4番目が「積極性」に関する項目で2.89であった。事前・事後のアンケート調査結果を比較すると, 上位2項目「責任面」と「マナー面」の順列が逆転し, 「積極性」及び「情意面」については順列の変化はなかった。事後のアンケート調査の記述の中では「指示されたことは, 毎日しっかりできた。」など, 指示された仕事の遂行に責任を持ち取り組み, 報告等も行ったと感じている学生が多数いたと言える。

また, 事前アンケート調査の「情意面」, 「積極性」, 「責任面」, 「マナー面」の各項目の平均値は, 3.03であったのに対し, 実習事後では3.33に数値が上昇しており, その差は0.3であった。いずれの項目の数値も事前より事後の方が上回っており実習後に学生の意識が高まっていたと言える。

③実習園の学生に対する評価と学生の事後の自己評価の対比

「保育者として資質について」の評価をA = 4点, B = 3点C = 2点, D = 1点と点数化し集計している。

図8は, 「保育者としての資質」に関する4項目の実習園の評価と学生の事後の自己評価とをグラフで対比させたものである。実習園から出された評価表によると, 「責任面」に関する項目は, 4項目中最も高い数値を示し, 3.23であり, 2番目に「積極性」に関する項目で3.22, 3番目に「情意面」に関する項目で3.15, 4番目に「マナー面」に関する項目で3.12であった。一方, 実習事後の学生の「保育者としての資質」に関する項目の順列は, 1番目が「責任面」に関する項目の3.49で, 2番目が「マ

ナー面」に関する項目で3.34, 3番目が「積極性」に関する項目で3.33, 4番目が「情意面」に関する項目で3.14となっている。実習事後の学生の評価と実習園の評価を対比させた結果, 「責任面」の項目は, 学生及び実習園共に順列が1番目となり, 学生は責任を持ち実習に臨んだと感じ, 実習園もそのことを高評価していたと言えよう。特徴的なのは, 「マナー面」に関する項目で学生の評価では2番目になっているのに対し, 実習園の評価では4番目となっており, 学生の「マナー面」に対する認識や考え方の甘さが窺えた。全体としては, 学生の評価の平均値が3.33であるのに対し実習園では3.19という結果であった。「保育者としての資質」に関しては, 実習園が求めている評価よりも学生の方が若干甘く評価している傾向が見て取れた。しかし, その数値差はわずか0.14であり, 大きな差とは言えない。

④自由記述

表5は「保育者としての資質」について自由記述をまとめたものである。

【保育技術について】

①項目概要

「保育技術について」の項目においては, 「発達段階を踏まえた援助」「広い視野と心配り」「保育技術の獲得」「保育の意味や幼稚園の役割理解」の4項目について質問している。

②学生の事前及び事後の自己評価の対比

「保育技術について」の自己評価を, A = 4点, B = 3点C = 2点, D = 1点と点数化し集計している。

図9は, 4項目に分類した実習事前・事後の「保育技術」についての集計結果をグラフで対比させた

表5 自由記述（保育者としての資質）

情意面	
ネガティブ	ポジティブ
言葉使い悪く、子どもたちに分かり易い表現を使うことができなかった。普段から心がけて行きたい。	子どもに分かり易い言葉で話すことを心掛けました。感情的な言葉は使わず、きちんとした優しい言葉で話すよう心掛けた。
保育中なるべく標準語で話そうとしましたが、つい方言が出てしまっていたところがあったので気を付けたいと思う。	たまに、方言がでたりしたけど子どもへの声かけは優しくできたと思う。
自分の単元中に、少し口調が荒くなった部分があった。次からはしっかり気を付けて行こうと思う。	まずは保育者がお手本となり、子どもたちにとって「いいモデル」になるようにと心掛けながら子どもと関わった。
たまに、感情的に言葉を発してしまう場面があり、その後とても反省しました。もっと心を広くもって接することができるよう頑張りたい。	言葉使いは、子どもが真似をしてしまうので常に丁寧な言葉で接するよう心掛けることができたと思う。
少し感情的になってしまったかと思います。愛着の湧いてしまった子だけに優しくしてしまうということがあった。	子どもが実習生に悪口を言って来てても感情的にならず悪口を言われると嫌な気持ちになる事を伝えた。
積極性	
ネガティブ	ポジティブ
何もせずにただ幼児を見ているだけの時があった。	子どもの目線に合わせてしっかり気持ちを受け止めることができたかなと思う。自分から幼児の中に入って、理解できるよう努力できた。
子どもたちが何をしたいのか、どうしたいのかを聞くよう努めました。子どもたちが楽しそうに遊んでいる中に入って行こうという積極性は少し足りなかった。	子ども一人一人に合った声掛けや援助の方法について保育者を見て学び、自分からも働きかけることができた。
子どもたちの行動を理解することが少しできなかった。もっと一人一人と関わって行くことが大切だと思ったので、これからは関わりを深めて行くことが必要だと感じた。	子どもが何を思っているのか、何をしたいのかを理解することは大変な事でしたが、自分なりに一生懸命関わることができた。
遊びの時、次の活動に移る時子どもに「遊ぼう」と誘われて断っていたので、子どもの気持ちを優先して積極的な関わりをした方が良かったと反省した。	子どもの立場、気持ちを考えながら遊ぶことができた。
一部の子と関わりを深めることがあまりできなかった。	自分から積極的に話しかけ、子ども一人一人との関わりを大切にすることができたと思うが、中にはあまり関わることはできなかった子どももいたので、全員と同じくらい関わられたらよかったなと思った。人見知りをする子どもへの関わり方が難しかった。
責任面	
ネガティブ	ポジティブ
指示通りに動いたつもりが、指示が上手く伝わってなくて、かえって担任の先生や他の実習生に迷惑をかけてしまった。しっかりと確認していくことが大切だと改めて感じた。	指示されたことは、毎日しっかりできた。
帰宅後の活動は、終わらせることがたまにしか出来なかった。	指示された仕事は確実に終わらせることができた。
与えられた課題、作業をその日のうちに片づけられなかった。	担任の先生にはすぐに様々なことを報告することができていた。
報告を忘れることがあったのが反省点です。	報告、連絡、相談を心掛けていましたが、少し報告が遅くなっていたことが反省点である。
報告を忘れてしまったり、聞き間違いをしたりしていたので、疑問に思ったり分からないことがあったらその場でちゃんと尋ねたり解決しようと思った。	子どもたちが帰った後に、お遊戯会の小道具作りや、音楽の練習の時の楽器の準備を迅速に行った。
マナー面	
ネガティブ	ポジティブ
挨拶を行う際元気が足りなかった。	実習園の教職員の方々たちだけではなく、子どもを送り出しにいらした保護者の方への挨拶も心掛けた。
自分としては、挨拶や基本的な礼儀作法はわかまえていたつもりだったが、実際は結構注意もされてしまったので、次の実習では反省して同じ過ちを繰り返さないようにしていきたい。	教室内での挨拶はもちろんのこと、廊下などで出会った先生方や来客の方へ気持ちよく挨拶をしようと心掛けた。
時折、名札の付け忘れなど注意不足の時があったのが反省点である。	挨拶はされる前にし、身だしなみも常に気を付けながら実習に取り組む事が出来たと思う。
自分のことに一生懸命になっていて先生への気配りがあまりできていなかったように思う。	挨拶を積極的に行い、身だしなみにも気を付け、常識のある行動ができたと思う。
廊下を子どもたちと一緒に走ったり、人とすれ違う時に立ち止まって挨拶をすることができなかったことがあったので、そこが反省点である。	挨拶はすれ違う人全員に行うことができた。普段の生活にも取り入れていけるように努力したいと思う。

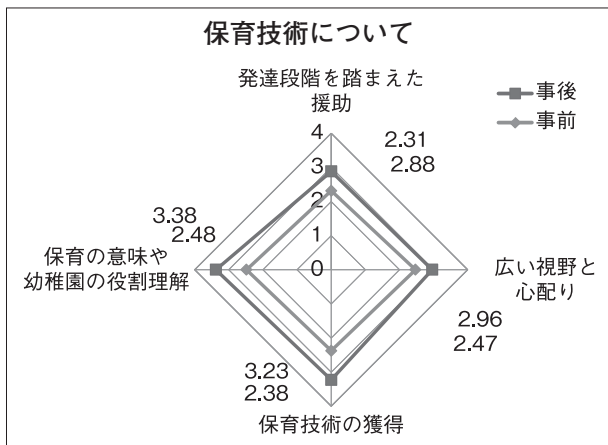


図9 事前及び事後の保育技術（学生）についての対比

ものである。実習事前の「保育技術」についての詳細は子ども学部紀要第6号に前掲しているため、今回は、実習事後の結果について詳細を示し、事前及び事後間の学生の意識について比較分析を行う。実習事後の「保育の意味や役割理解」に関する項目は、4項目中最も高い数値を示し、3.38であり、2番目が「保育技術の獲得」に関する項目で3.23、3番目が「広い視野と心配り」に関する項目で2.96、4番目が「発達段階を踏まえた援助」に関する項目で2.88であった。実習事前の「保育技術」に関する項目の数値の順列は、1番目が「保育の意味や役割理解」に関する項目の2.48、2番目が「広い視野と役割理解」に関する項目の2.47、3番目が「保育技術の獲得」に関する項目の2.38、4番目が「発達段階を踏まえた援助」に関する項目の2.31であった。実習事前・事後のアンケート調査結果を比較すると、「保育の意味や役割理解」については事前も事後も順列変わっていないが、「保育技術の獲得」と「広い視野と心配り」に関する項目で上下順列が逆転し、「発達段階を踏まえた援助」に関する項目は実習事前・事後共に変化がないという結果であった。特筆すべきは、事前と事後で最高値を示した「保育の意味や役割理解」に関する項目の数値が、実習事前では2.48であるのに対し、実習事後では3.38となり0.9という大きな差が表れていた。学生のアンケートの記述でも「生活習慣の基本的なことを身に付けることができ、子どもたちが楽しく遊び、安心して過ごすことのできる環境を作ることなどたくさんの役割があると思う。」や「子どもの命を預かっている以上、きちんとした環境でお世話をし、教育する大切さや役割を概ね理解できたと思う。」など記されており、

体験を通すことでより理解が深まる保育者の役割理解や保育の意味について学びとっていたことが窺える。また、事前アンケートの「発達段階を踏まえた援助」、「広い視野と心配り」、「保育技術の獲得」、「保育の意味や幼稚園の役割理解」の各項目の平均値は、2.41であったのに対し、実習事後では3.11でその差は0.7であった。この上昇した0.7の差は、「実習態度」、「保育者としての資質」、「保育技術」の3つの項目中最も大きな差であった。「保育技術」に関する項目は最も学生が実習を通して意識が高まりなおかつ保育技術を得ることができた実感している項目であった。

③実習園の学生に対する評価と学生の実習事後の自己評価の対比

「保育技術」についての評価をA = 4点、B = 3点C = 2点、D = 1点と点数化し集計している。

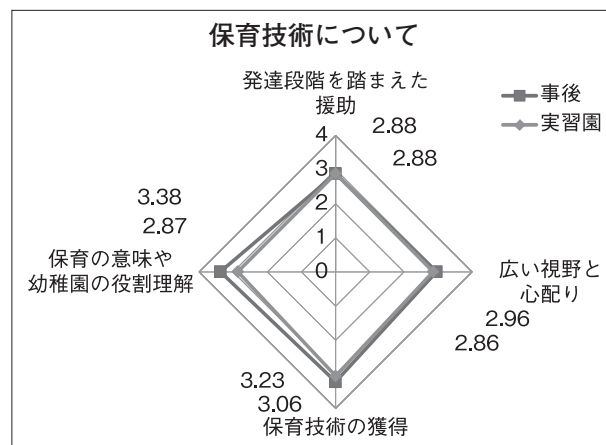


図10 実習園の評価と学生の実習事後の自己評価の対比（保育技術について）

図10は、「保育技術」に関する4項目の実習園の評価と学生の実習事後の自己評価とをグラフで対比させたものである。実習園から出された評価表によると、「保育技術」に関する項目は、4項目中最も高い数値を示し、3.06であり、2番目に「発達段階を踏まえた援助」に関する項目で2.88、3番目に「保育の意味や役割理解」に関する項目で2.87、4番目に「広い視野と心配り」に関する項目で2.86であった。

一方、実習事後の学生の「保育技術」に関する項目の順列は、1番目が「保育の意味や役割理解」に関する項目の3.38、2番目が「保育技術」に関する項目で3.23、3番目が「広い視野と心配り」に関する項目で2.96、4番目が「発達段階を踏まえた援助」に関する項目で2.88であった。実習事後の学生

表6 自由記述（保育技術）

発達段階を踏まえた援助	
ネガティブ	ポジティブ
5歳児の子は、もうすでに自分で考えて動くことができているのにどこまで教えたらいいのか難しい面もあった。	最初の方は、着脱衣の時や身支度の時など、手助けをしてしまうことが多かった。子どもが自分でできることは、見守ることが大切と分かった。
クラスの子どもの中には発達段階に差があり、どう関わって良いかわからない子もいて少し戸惑った。	一人一人子どもを観察し、その子どもに合った声掛けや援助をする事ができた。
自分の考えが甘く上手く行くことが出来なかった。もっと前からしっかりと把握しておくべきだった。	4歳児は自分が思っていたよりもだいぶ大人で部分実習や責任実習ではもっと難しいことも出来たかなと思った。4歳児の発達段階について実習を通じて知ることができた。
子どもの発達段階がどの程度なのかあまり分からなかったの、あまりしっかりと援助することが出来なかったと思う。	生まれた月によって発達段階に差があるのを意識し、行動をとることが出来た。
自分なりに考えて行ったつもりだったが、まだ発達段階に対する知識が少なかったと思う。	一人一人発達段階が違うので、その子に合った援助をするよう心掛けることが出来たと思う。
広い視野と心配り	
ネガティブ	ポジティブ
クラス全体への目配りが難しかった。	責任実習の個所だけでなく様々な活動において全体を見ながら行った。
色塗りなどは全員の様子をに気を配ったり、魚釣り際には全員が釣れるよう配慮をした。しかし、ほとんどしゃべったことのない子もいるので、そのことが残念だった。	衣服の着脱やトイレの援助など手をかけ過ぎず、程良い援助を心掛けた。
個人と全体の両方を見るのは難しく、目が届かない時もあった。次の実習の課題として取り組んでいきたい。	困っている子ども、泣いている子どもに寄り添って必要な援助を行うことが出来た。
全体に目配りが上手くできなかったことがあった。個人にはできていても、その時は全体をみることはできていなかった。	常に全体を見て誰が援助を必要としているのかすぐに反応出来た。
個人観察が上手く平等にできなかったと反省しています。保育者としての目線で子ども達を平等に見ることができるよう意識を高めようと思う。	一人一人と関わりながら、全体に心配りをするよう心掛けた。
保育技術の獲得	
ネガティブ	ポジティブ
行動を早くするように促すよう指導していたが、最初より子どもが耳を傾けてくれるようになってくれた一方で、甘やかせるように対応してしまったことがあった。	子どもを楽しませる遊びを展開したり、子どもと信頼関係を深めることや、関わり方等、学ぶことが出来たのでそれを今後もっと身に付けていきたい。
子どもへの対応が難しく出来ないこともあった。	子どもの注目を集めたい時にわざと静かに話しながら子どもを集中させるなどいくつか技術を身に付けることが出来た。
ピアノや手遊び、子どもの反応や行動、活動内容への取り組みの予測など、まだまだ身に付けていく必要があることがたくさんあった。	私の知らない手遊びや歌をたくさん知ることが出来た。歌を覚える事は難しかったが手遊びは何個かおぼえる事が出来た。
多くの言葉掛けなどを学ぶことができた。しかし、その多くをまだ使いこなせてはいないのでこれからの課題だと思う。	環境の作り方も子どもとの接し方、清掃から何からなにまで身に付くことが多々あった。
先生方を見て自分で見よう見まねでなんとかやっという感じでした。まだまだ子ども達への配慮が足りない反省した。	保育者が子どもにどのような声掛け、工夫、環境づくりをしているのか観察し、その意図を教えてもらったりとても勉強になった。
保育の意味や幼稚園の役割理解	
ネガティブ	ポジティブ
まだまだ理解できていない部分があると思う。	家庭の子育てとは違い、社会に出るために人間関係を育成したり、技術を身に付けることを促すために様々な活動があることを理解した。
あまり深くまでは理解出来ていなかったです。もっと理解できたと思う。	子どもの命を預かっている以上、きちんとした環境でお世話をし、教育する大切さや役割を概ね理解できたと思う。
	生活習慣の基本的なことを身に付けることができ、子どもたちが楽しく遊び、安心して過ごすことのできる環境を作ることなどたくさんの役割があると思う。
	10日間を通して子どもたちや先生方と関わり、理解ができました。
	子どもの将来を考えた援助や基本的生活習慣の自立など、保育者は専門的知識や技術が求められている。

の評価と実習園の評価を対比させた結果、特徴的なこととして「発達段階を踏まえた援助」については学生の評価より実習園の評価の方が高くなっていることが挙げられる。また、「保育の意味や役割理解」については、学生の評価では順列が1番目になっているが、実習園の評価では3番目となることから、学生の保育者の役割理解に対する認識は不足していると言え、より一層の保育者に対する役割理解が求められていると言えよう。全体としては、実習園側の全項目の平均値が2.92であるのに対し、学生は3.11であることから「保育技術」については学生の方が甘く評価している傾向が見て取れた。

④自由記述

表6は保育技術について自由記述をまとめたものである。

【主要3項目の対比】

「実習態度について」「保育者としての資質について」「保育技術について」の3項目について実習事後の学生の評価と実習園の評価を対比させている。

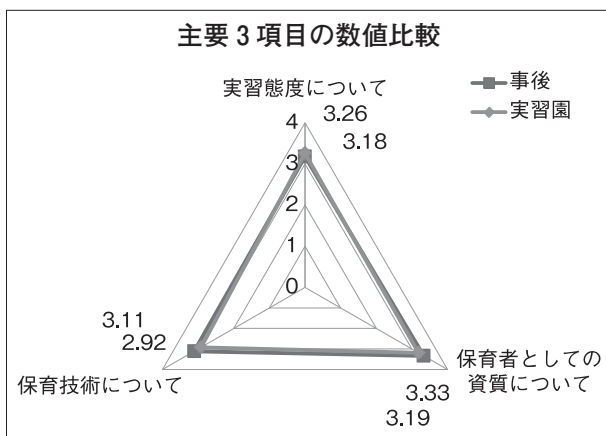


図11 主要3項目の対比 (学生の事後の評価と実習園の評価)

図11は、「実習態度」について、「保育者としての資質」について、「保育技術」についての各項目を、学生の実習事後と実習園の評価の主要3項目を積算し、平均値について比較したものである。学生の事後評価では、「保育者としての資質」が3.18で最も数値が高く、2番目が「実習態度」についての3.18、3番目が「保育技術」についての3.11という結果であった。一方、実習園の評価では「実習態度」が3.26と最も数値が高く2番目が「保育者としての資質」で3.19、3番目が「保育技術」についての2.92という結果であった。対比させた図を概観すると一目瞭然であるが、学生と実習園からだされた評価に大き

な差は見られず、グラフの各項目の線が重なり合っている。このことから、学生が行った自己評価と実習園が行う評価は概ね合致していたという結果となった。

6. おわりに

本研究では、子ども学部第6号において、櫻井・二宮・井上(2015)が述べた課題である実習前と実習後で学生の意識がどのように変化したか、実習で何を学んだのか、また学生の自己評価と実習園の評価の相違についての検証を行った。実習前と実習後に実施したアンケート調査を比較した結果からは「実習態度」「保育者としての資質」「保育技術」の各項目の全てにおいて数値が上昇しており、学生は実習に参加することによって大きく意識が向上していたことが明らかとなった。また、実習で何を学びとったかについては、記述に表れており、「一人一人子どもを観察し、その子どもに合った声掛けや援助をする事ができた。」「家庭の子育てとは違い、社会に出るために人間関係を育成し、技術を身に付けることを促すために様々な活動があることを理解した。」などの記述から、発達段階を踏まえた援助や保育の意味や幼稚園の役割を理解しようとしていたことが明らかとなった。

一方、実習園の評価では相対的に高い評価を得ていたが、「環境整備」や「マナー面」の項目で学生の評価と比較すると差が生じていたため、今後の課題としなければならないであろう。

また、今回のアンケートとは別に実習事後のまとめとして感想を記述しているが、「子どもと目線を合わせながら名前を呼ぶことで一人一人の人権を尊重することの大切さ」、「子どもの変化に素早く気づき柔軟に対応する力」、「子どもたち一人一人の発達段階に応じた言葉かけや援助の方法」などが特に保育者として必要であると感じていた。

今回は、学生の意識が実習前より実習後に高まっていたという結果を得ることができた。このことは、実習園で学生に関わって下さった多くの教職員の方々のご支援があったからこそである。今後そのことに深く感謝しつつ、学生の高まった意識を絶やさぬようより一層充実した実習指導を行っていききたい。

参考文献

- 1) 櫻井京子 二宮貴之 井上聖子「幼稚園教育実習Ⅰ実習指導の取り組みについて」西九州大学子ども学部紀要 第6号(2015) pp.79-91
- 2) 西九州大学子ども学部子ども学科編「幼稚園教育実習・保育実習の手引き」(2011) pp.1-135
- 3) 杉原徹 小島一久「短期大学と附属幼稚園との連携」高知学園短期大学紀要 第41号(2010) pp.55-64
- 4) 杉山喜美恵「実習事前指導あり方について3. 責任実習の現状分析より」東海女子短期大学紀要 第31号(2005) pp.37-44
- 5) 大井佳子 吉田若葉「4年制での保育者養成における幼稚園教育実習指導試案(1)―幼稚園現場との協働の模索―」北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要 第5号(2012) pp.1-14
- 6) 岩淵善美 金子眞理「幼稚園教育実習における学生の自己評価分析」保育研究 第42号(2014) pp.54-61